2019年6月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第509号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

■出版梓会第15回新聞社学芸文化賞特別賞 ―――☆★☆

創立30年目の受賞とこれから

沖縄の事にたえず関心を持ち続けている読者に支えられ 多岐にわたる出版ジャンルで、発行点数約500点

文／ボーダーインク　池宮紀子

「地域力」が評価された特別賞

少し前のことになってしまったが、2019年1月16日、東京神保町の如水会館で出版梓会第15回新聞社学芸文化賞特別賞の贈呈式に参加すべく、沖縄から3人で上京した。さすがに気温が低く寒かったけれど、着込んでいったのと緊張感からかあまり寒さは苦にならなかった。

今回受賞した「新聞社学芸文化賞特別賞」は主要新聞社・通信社の選考委員が選考を行なっているとのことで、受賞理由は「地域力」が評価されたものとなっていた。確かにボーダーインクは沖縄の地域力にあやかっているし、逆に沖縄の地域力をアピールする立場でもある。そういう意味でも今回の受賞はありがたく、うれしく思っている。また日本全国数ある出版社の中から、遠く離れた沖縄の地のボーダーインクがよく選んでもらえたなと正直驚いた。

偶然だったとのことだが、出版文化賞を受賞した作品社が40周年、同特別賞のひつじ書房が30周年、新聞社学芸文化賞の亜紀書房がちょうど50周年の年に当たるという。

そしてボーダーインクも今年30年目を迎える。創立は1990年、既に沖縄の出版界で活躍していた宮城正勝社長と編集の新城和博と新入りの私の三人での創業だった。歴史、自然、沖縄戦関係の出版物が中心の時代に、違った切口の沖縄の本を出したいということでいろんなジャンルの本を出して来

受賞挨拶するボーダーインク・池宮紀子氏

た。振り返ればよく30年続けてこれたものだと思う。その意味で今回の受賞は30年目の激励と受け止めたい。

これまでに発行点数は自費出版も含めて約500点、それ以外に編集業務で全集や記念誌、字誌などを手がけている。出版内容は、歴史、文化、自然、エッセイ、小説、ノンフィクション、実用、絵本と多岐にわたる。要は私たちがここに住んで生活しているという立場での出版ということになるかもしれない。先の「地域力」ではないが、目の前にあること、暮らして感じている事、必要とされていることなどを県内の読者に向けて発信しているものが大多数で、当然沖縄関係の書籍がほとんどである。

新体制で再スタート

実は2016年12月に創業者の宮城が社長を退任し、新体制となった。それまで七人だったのが現在編集が三人、書店営業一人、経理一人の五人体制で日々慌ただしい毎日を過ごしている。よく言えばミニマム、現実は仕事が追っつかない状況だ。

沖縄では、県内書店に書店営業が直納し、チェックして売れた分の請求を行うという直接取引をずっと行なっている。手間はかかるが書店の負担が少なく、実質の販売数を把握することができる。しかし、入金が実質売上分だけなので、なかなか現金が入ってこないという現状もある。

県外への窓口として、相談役として地方・小出版流通センターには創立当時からずっとお世話になっている。今回も授賞式の前にセンターを訪問し、授賞式の事前情報や自社本の棚をチェックしたり、話題の本の情報を収集させていただいた。

以前、川上賢一氏から「ボーダーインクは第二世代と第三世代が両方いるから2.5世代だね」と言われたことがある。その時はあまりピンとこなかったのだけど、会社を引き継いだ今は実感することが多い。地方の出版社で世代交替は難しいという。ボーダーインクは最初から2.5世代だったからできた部分があると思う。ただ30年間の蓄積（在庫を含めて）をどう活かして、どう進んでいけばいいのか。まだまだこれからの課題である。

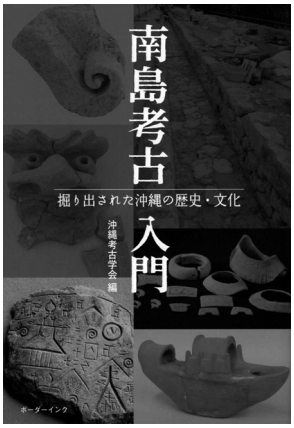
自薦図書5点

梓会出版文化賞には自薦図書を5点選んで推薦した。その前年が企画本が少なく、書店の売り上げが落ち込んだこともあり、もっと売れる本を企画して出していこうという機運の中で、特に豊作の年であったと思う。そのよ

うな時にお声がかかり、受賞することができたのもめぐり合わせかもしれない。

ちなみに該当書籍25点の中から自薦図書として出したのは次の五点。『御願の道具と供えもの事典』は沖縄独自のマニアックな民俗学関係の事典。『南島考古入門』は沖縄考古学の最先端がまとめられた学術的な入門書。『帰る家もなく』は沖縄をルーツとするノンフィクション作家与那原恵のエッセイ集。『おきなわの一年』はかわいいイラストを多用した子どもから大人までを対象とした新シリーズの第一冊目。そして『宮城ヨシ子写真集　Frame out.』は日常の何気ないユニークな写真集。

【御願の道具と供えもの事典】稲福政斉著／ボーダーインク刊／2018年1月発行／ISBNコード978-4-89982-330-8／税込価格2,376円



【南島考古入門　掘り出された沖縄の歴史・文化】沖縄考古学会編／ボーダーインク刊／2018年4月発行／ISBNコード978-4-89982-342-1／税込価格2,160円

ある意味、バラバラな取り合わせだけど、これがボーダーインクのラインナップと言える。他に自費出版の小説や詩集も数点出版。昨年の「山ノ口貘賞」（詩の文学賞）を受賞した作品もある。さて今年はというと、去年ほどのラインアップは準備できていないのが現状で、来年の30周年記念出版についても今のところ何の準備も行なってはいない。

初版部数

普段からボーダーインクには来訪者が多い。取材はもちろん、読者の方、同業者の方などなど、多くの方が狭い事務所を訪ねてくる。いろいろな話をする中でよく驚かれるのが、ほぼ書籍売り上げの90％が県内向けでありながら、初版部数1500～2000部ということだ。現在全国出版でもかなり部数は抑えられているというので、人口約140万人の市場でこの数は驚きというわけだ。

よく沖縄は出版が盛んですねと言われる。最近は特に県外の出版社から沖縄関係の書籍がよく出版され、それらも沖縄でよく売れるという現実がある。当たり前ではあるが、沖縄が出版が盛んなのは沖縄の事にたえず関心を持ち続けている読者いるということで、沖縄の出版社はそららの人に支えられているということかもしれない。

地域で出版をするということは、読者が近いということだと思うが、一方中央から遠く離れているという面もあり、実際は県外でももっと売れてくれればと思っている。今回の受賞が「ボーダーインク」という出版社が沖縄にあるという認識を持っていただき、興味を持ってもらえる一助になってくれればと思う。

（いけみや　のりこ／ボーダーインク代表取締役）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8％）表示です。

この「新刊ダイジェスト」のバックナンバーを弊社Ｗｅｂサイトにたくさん掲載してます。
機会がございましたらぜひご覧ください。アドレスは以下の通りです。
http://neil.chips.jp/chihosho/digest/index.html
＊検索サイトで「地方・小出版流通センター」とキーワード検索してください。また、右のＱＲコードをスマホのカメラなどを使って、アドレスを読み取ってください。

『朝鮮通信使と彦根　－記録に残る井伊家のおもてなし』●野田浩子著

江戸時代、井伊氏が西への備えとして封じられた彦根。彦根城は中山道からは外れますが、城下を通る別の街道も存在しました。その名も朝鮮人街道といいます。名の由来は朝鮮通信使の往還に用いられた街道だったところにあります。なぜ中山道から離れた道が整備され、通信使の往還に使われるようになったのでしょうか。そこにはこの道の持つ性格に加え彦根が譜代の重臣を配置した要所だということにあります。とりわけ二代当主井伊直孝は通信使の供応に心を砕いていました。往路の不足を復路までに補う素早い対応や、沿道の警護や休憩所の設置など指示は非常に事細かです。

幕府の重職を務めるだけに、粗相をすることは許されません。それだけに通信使からの評判も非常に良く、藩士と通信使の交流にも心温まるものがありました。様々な史料がそれらを今に伝えています。また相手への敬意と交流の歴史を語り継ぐことが外交にいかに重要であるかも痛感させられます。

◆ 1,944円・四六判・174頁・**サンライズ出版**・滋賀・20190330刊・ISBN9784883251940

『ポスト地方創生　ー大学と地域が組んでどこまでできるか』●平井太郎著

地域経済の活性化と雇用機会の創出を目的とする国の地方再生事業は2014年から始まったが、弘前大学ではそれに先立ち、青森県からの働きかけを受けて、平内町第一藤沢、弘前市常盤野など県内6地区で集落点検を実施し、その結果を基に住民と共同して地区の未来を拓く活動に取り組んでいる。テーマは土地の事情から、休耕農地での地域での活用・婚活・獅子舞の継承、ものづくり学校を拠点とした加工品生産や活動などが選ばれた。大学からは、地域計画学、経営学（中小企業論）、社会学、人類学、農村計画学を研究領域とする研究者が複合的に参加している。本書はそれぞれの専門分野から分析、総括し、さらなる方向性を提示したものである。大学は伴走役に徹し、地域と大学が相乗的に高め合う関係の構築を目指している。ポストとは、地方再生の先にある地域の持続可能な未来を展望する「地域共創」の望ましい姿への、あくなき挑戦の意欲を示したものといえよう。

◆ 1,512円・A5判・204頁・**弘前大学出版会**・青森・20190311刊・ISBN9784907192693

『文化人類学と現代民俗学』●桑山敬己、島村恭則、鈴木慎一郎著

文化人類学というと一般に、未開と言われる社会の風習、儀礼や神話等を研究する西洋で発達した学問であると認識されていると思う。それは民族学という呼び名と区別することなく使われているのではないか。一方、これと発音が同じ民俗学でイメージするのは、日本国内の地方に残る伝承や習俗、民間信仰等を採集するような学問、といったところだろうか。本書は、その二つのミンゾクガクを勉強しようという学生や興味を持つ一般の人向けに、歴史と概要、さらには最新の動向をわかりやすく説明したものである。第一章では文化人類学を取り上げているが、基本的な定義から説明してくれている。中でも文化相対主義の考え方と倫理性には学ぶことが多いのではないか。第二章では民俗学を取り上げているが、それは日本で独自に進展した学問ではなく、もともとフランスを中心とする啓蒙主義や覇権主義を相対化する形で、ドイツのヘルダーやグリム兄弟によって土台がつくられた歴史がある、という点は押さえておきたい。

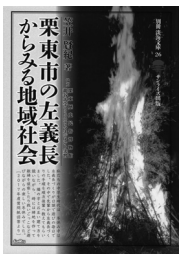
◆ 972円・A5判・99頁・**風響社**・東京・20190408刊・ISBN9784894894129

『知っていますか日本のこと　ー学ぼう話そう日本事情』●ＪＡＳＳＯ日本語教育センター編

平成30年5月1日現在、外国人留学生は29万8千980人と前年比12％増で、年々増加傾向にある。その統計を取っているのが平成16年に国の様々な学生支援事業を総合的に実施する中核機関として創設された独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）。主に奨学金事業や留学支援、また外国人留学生の就学支援も行っている。本書はJASSOが設置する日本語学校が日本事情を学ぶ留学生向けに作った教科書。進学先で日本人学生と授業を受ける際に日本の習慣やルール、文化への理解を深める手助けとなるように構成されている。日本語初級修了レベルの学生から理解できる語彙、文法を使用し、全ての漢字にふりがなが付いている。“日本人の名前”、“野球と日本人”、“マンガ・アニメ”など11課と7つのコラムがあり、イラストや写真も多用され、親しみやすい内容となっている。日本人が読んでも一般常識を試され、頭の体操になるかも。留学生と日本人の交流にも生かせるテキストである。

◆ 2,052円・B5判・114頁・**穂高書店**・東京・20190331刊・ISBN9784938672386

『栗東市の左義長からみる地域社会』●笠井賢紀著



左義長という漢字を見て、ピンとくる人はあまりいないかもしれない。正月飾りを燃やす、全国的に見られる小正月の行事、と言うとなんとなく「どんと焼き」という言葉が思い浮かぶかもしれない。本書は滋賀県栗東市の各区に残るこのどんと焼き（左義長）について各自治会への民俗調査や生活史調査からその過去と現在、可能性について概観するものである。正月飾りはゴミとして出すのはどうも、という神性への感受性が、今でもわずかに地域住民の間に残っているものの、神社、寺での炊き上げという代替手段があり、左義長の神事としての物語性にはこの行事を地域社会で継続させる力はなくなっていると著者はいう。ただ、この行事は過去において、その主役である子どもたちにとって単純に楽しいものであり、年の離れた先輩たちと共に過ごす非日常的な祝祭の時空をもたらすものだった、という点に着目する。そして通過儀礼的な、地域社会による子どもの社会化機能にこそ左義長継続の可能性があると見ている。

◆ 1,944円・四六判・200頁・**サンライズ出版**・滋賀・20190305刊・ISBN9784883251933

売行良好書　期間：2019年4月15日～5月14日

［出荷センター扱い］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『図説１７都県放射能測定マップ＋読み解き集』2,500円・みんなのデータサイト出版　(2)『よみきかせのきほん』810円・東京子ども図書館　(3)『東京の森のカフェ』1,404円・書肆侃侃房　(4)『毎日写真』1,836円・ナナロク社　(5)『お寺参りが楽しくなる　奈良百寺巡礼』1,058円・京阪奈情報教育出版　(6)『近江の山城を歩く』2,376円・サンライズ出版　(7)『暗黒との対話』4,860円・忘羊社　(8)『出雲王国とヤマト政権』2,430円・大元出版　(9)『近世新潟の城と陣屋』2,160円・随想舎　(10)『子どもと楽しむ季節のスープ』1,620円・今井出版　(11)『著作権法入門早わかり』2,592円・出版メディアパル　(12)『ツバメのくらし写真百科』2,052円・弦書房　(13)『写真でつづる　アマミノクロウサギの暮らしぶり』1,944円・南方新社

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『たべるのがおそい　Ｖｏｌ．７』1404円・書肆侃侃房　(2)『本屋大賞２０１９』600円・本の雑誌社　(3)『東京かわら版　５月号』500円・東京かわら版　(4)『本の雑誌　４３２号』720円・本の雑誌社　(5)『近江の山城を歩く』2376円・サンライズ出版　(6)『シェルスクリプト入門の入門』324円・暗黒通信団　(7)『古墳人、現る』1620円・上毛新聞社　(8)『北海道日本ハムファイターズオフィシャルガイドブック　２０１９』1080円・北海道新聞社　(9)『女川復幸の教科書』1080円・プレスアート　(10)『姫路城まるごとガイドブック』2160円・中国書店

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『旅先銭湯２』1296円・さいろ社　(2)『お寺参りが楽しくなる　奈良百寺巡礼』1058円・京阪奈情報教育出版　(3)『熊本地震４，１６あの日僕たちは』1080円・熊本日日新聞社　(4)『奄美のネコ』2160円・南方新社　(5)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(6)『出雲王国とヤマト政権』2430円・大元出版　(7)『奥多摩登山詳細図（西編）』950円・吉備人出版　(8)『備前刀』929円・日本文教出版　(9)『近江の山城を歩く７０』2376円・サンライズ出版　(10)『近世新潟の城と陣屋』2160円・随想舎　(11)『母の味』1620円・石風社　(12)『暗黒との対話』4860円・忘羊社

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

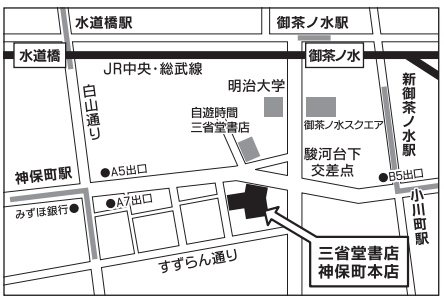
トピックス ―― ★★★

▼東京文京区目白台の永青文庫にて、7/3（水）まで春季展【生誕130年　漆芸作家　高野松山　今よみがえる究極の技】が開催中です。〈熊本に生まれた高野松山（たかのしょうざん・1889～1976）は、熊本の工業徒弟学校で漆芸を学び、ついで京都市立美術工芸学校・東京美術学校に学びました。のちに細川護立（ほそかわもりたつ・1883～1970）の援助を得、目白台の細川邸内に住み込んで「昼は殿様のボディーガード、夜間に制作」という生活を送ります。その後、1955年には重要無形文化財「蒔絵」保持者に認定されました。〉（永青文庫ＨＰより）。図録【永青文庫 No.106】は、ジュンク堂書店池袋店、三省堂書店池袋店等にて販売中です。

▼ ＮＰＯ法人アジア太平洋資料センター（ＰＡＲＣ）が、開講するＰＡＲＣ自由学校の市民講座から。〈【ネット上の人権侵害を考える―ヘイトスピーチ・フェイクニュース・ネット炎上】インターネットの普及からおよそ25年、当初は主流メディアに対する「アンチ」であることに可能性を見出していたインターネットも、今やあらゆる人の生活に欠かせない基本的なインフラとなりました。そうした中で、ネット上のヘイトスピーチや差別、ネット炎上や個人に対する集中的な誹謗中傷、ネットデマやフェイクニュースなどの問題に対して、「ネットだから仕方ない」「嫌ならネットを見なければよい」で済ませることは、もはやできません。この講座ではこうした問題に最前線で取り組む講師陣を迎え、「ネットについての知識」と「人権についての知識」の両方をクロスさせながら、さまざまな世代の受講生のみなさんと一緒に、これからの取り組みについて考えていきます。● 2019年6月ー11月 ●原則として火曜日 19:00ー21:00 ●全8回 / 定員30名●受講料 26,000円〉（PARCのHPより）

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店　営業のごあんない

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。